

「単調と思える日々に」

探偵小説や法廷小説を読んでいますと、他愛もない些細な出来事や証拠を繋ぎ合わせて、隠された真相に辿り着く、という筋書きがよくあります。と言いますか、その「繋ぎ合わせ」の作業であるところの推理や調査の妙が、こういう小説作品の醍醐味ですね。壁についている小さな傷が、犯人特定の決め手になったり、防犯カメラに一瞬映った後姿から逃走経路が分かったり、とか、そういう感じです。読者である私たちも、小さな出来事や証拠を見逃さないように、言葉の端々にまで考えを巡らせてみますが、その読者の見抜こうとする努力を良い意味で嘲笑い、裏切るのが、小説家の腕の見せ所とも言えるでしょう。まぁ、時々、物語の終盤になって、いよいよ真相解明というところで「実は、犯人には双子の兄弟がいたんです」とか「まだ出回っていない超高性能な装置を使ったんです」とか、そんなんズルいと思えるような真実を突き付けてくる作品にも出会いますが。もっとも、登場人物と一緒にになって謎解きに一生懸命になっている、その読書体験こそが、一番楽しいとも言えますけどね。

私は、探偵小説や法廷小説で発揮される「真相解明」とか「謎解き」というものを、日常の生活に持ち込んでみるのは、良いんじゃないかと思っています。もちろん、それは探偵や刑事や弁護士の真似事をしてみようじゃないか、という話ではなく、些細と思える日常の出来事を、一つ一つ結び付けて、自分なりに新しい真相を探ってみても楽しいんじゃないかと。と言っても、これはあくまで自分の身近に起こる出来事を繋ぎ合わせてみようという試みであって、時事ニュースやインターネットの情報を繋ぎ合わせて、自分に都合の良い真実を創り出そうということではありません。いわゆる、デマに便乗したり、オカルトに傾倒したり、ということではありません。人畜無害に、

今日、自分に起こった出来事をつぶさに観察して、いつもなら意識に残さず、すぐに忘れてしまうようなことにも心を留めて「なるほど、そうか、これとこれには関連があるかも知れない」と遊んでみる。偶然を偶然と片付けてしまわず、ちょっと深読みして隠された意味を探求してみる。そういう、まあ、知的遊戯と言いますか、日常のエンタメ化と言いますか。そういう遊びから、日常の新たな発見、退屈しない毎日が得られることがあるんじゃないでしょうか。

キリスト教を信じる者の立場から言いますと、この世界は、そもそもとても刺激に満ちています。だって、今日の聖書箇所の書き出し部分なんて、どういう物語の始まりだって感じじゃないですか。「あなたがたは、キリストと共に死んで、世を支配する諸靈とは何の関係もない」。私たちは、すでにキリスト・イエス様と一緒に死んでいる、って言われているわけです。もちろん、肉体的な意味じゃないことは、胸に手を当ててみれば鼓動も感じられて、明白です。でも、この世にどっぷり属して、浸かり切っているわけじゃない立場から、私たちはこの世を生きている。この世を観察し、考えることができる。それって、とても刺激的なことだと思います。「カネが全てだ」という世の理に対して、私たちは神聖な領域について言葉を語ることができる。「そりや、カネも大事だけど、でも、そうじゃない生き方を、私は確実に知っている」と言える。「こうあらねばならない」「こうしなきゃいけない」という世の理に対して、「いや、そうじゃない生き方をして、でも、幸せそうにしている人を私は知っている」と言える。自分の利益を最大化する発想とは真反対に、奉仕し、献身し、他者の笑顔と安心のために尽力して、立派に生き抜いた人がいるんだよ、って借り物の言葉じゃなく言うことができる。それって、とても特別だし、クールですよね。

私たちは、確かにキリストに囚われていますが、その代わり、この世界、この世の理に対しては自由である、ということです。格好良く、自由な生き様を私たちは知っている。そして、その自由な立場から、強いられるでも、押し付けられるでもなく、自らの意志と判断で、自らの言葉と行動

を選ぶことができる。これこそ、ある意味で、探偵のような姿ですね。先入観や組織のしがらみに囚われず、事件を観察し、真相に近づいていく。私たちも、多分、人生において、同じようなことができます。果たして、生きる意味は、どこにあるのか、それは何なのか。幸せとは、良い生き方とは。手垢のついた理想論や良い話ではなく、祈りつつ、神様に尋ねながら求めていく、明日を生きる力をくれるような真実の知恵です。

私たちは、「キリストと共に死んだ」存在であると同時に、「キリストと共に復活させられた」存在でもあることが、3章1節には書いてあります。これも、もちろん肉体的にということじゃありません。具体的に言えば、洗礼という出来事を通して、私たちは新しい人生に招待されたのです。これまた、新しい人生と言っても、会社員がどっかの王様になるとか、定年退職したと思ったら小学生からやり直すとか、そういう奇跡的な新しい人生ではありません。もっともっと地味で変わり映えしないものです。でも、多分、世界の見え方は変わります。変わったはずです。この世の理を知りつつ、加えて、「上にあるものを求める」という感性が、少なくとも加わります。「神様」と言って祈ることで、大切な人が天国にいると信じることで、全ての出来事に御心があるんじゃないかと考えることで、ちょっとだけ世界の見え方が違ってきますよね。

そういう感性を、見え方を、ようするに信仰を得た先で、単調と思える日々をつぶさに観察してみる。偶然を偶然と片付けるんじゃなくて、そこに繋がりを想定してみる。物語性のないつまらない毎日に、神様が執筆された筋書きがあることを思い描いてみる。もちろん、最後は幸せになるハッピーエンドな筋書きです。どうせ未来なんて誰にも分からぬ。だったら、つらく悲しい明日を夢想するんじゃなくて、「栄光に包まれる」ような神様と共にある明日を信じてみたいと思います。そのゴールを信じることで、今日の悲しみも、明日の不幸も、深刻なレベルから、ちょっとだけ、その後の展開を期待できるレベルに引き上げができるんじゃないでしょうか。これは単なる

楽観的判断ではなくて、信仰があるからこそできる余裕のある人生観察ですね。

私たちは、神様のことを知りたくて聖書を読みます。自分の救いや幸せを確認したくて御言葉に耳を傾けます。でも、今も生きていらっしゃる神様は、聖書の御言葉だけじゃなく、私たちの日常の至るところに、折に触れて、現在進行形の御言葉を置いてくれているはずです。それを聞き出して、探し出して、日々の糧にすることも大切な信仰の営みです。平和堂で「あっ、あの服いいなあ」と思ったら、それと同じ服を着た人に、すごく親切にされて有り難い気持ちになった。なんて出来事の背後にある主の御心を読み解いてみるのも楽しいかも知れません。偶然入ったバーで友人と青年会議所の話をしていたら、そのバーのマスターが青年会議所の人で、その場で理事長に電話して、青年会議所加入の話が付いたと思ったら、その年のクリスマスには駅前で幼稚園も巻き込んでキャロリングをしていた。なんて出来事の背後に、どんな御心があったのかな、と。もっとも、これは試みであって、加入を断ることこそ主の御心だったという解釈もできます。まあ、結局、何が正解で真実かは分かりません。ただ、そうやって祈り尋ね求める日々こそ尊くて楽しいんじゃないかなと。

キリストと共に死に、キリストと共に復活して、今を生きる私たちが、いつも神様の御心を感じ、退屈や単調とは無縁の恵みに満ちた幸せな日々を生きることができますように。たとえ不幸に見舞われても、その不幸を人生という物語の中において推理し、吟味し、より良い生き方へと至る証しとすることができますように。最後にお祈りを致します。

神様。

今日も私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたは、大切な御言葉を、聖書を通して教えてくださると同時に、私たちの日々の生活の中にも、多くの恵みと気付きを与えてくださいます。どうか、私たちがそのことに気付いて、退屈や単調を遠ざけ、そして、不幸や不運をも乗り越えて、あなたの導かれる信仰の道を歩むことができますように。私たちが天へと召される、その間際「悪くない毎日だった」と感謝することができますように。どうか、私たちの日常に関わり、支え、お守りください。

このお祈りを大切なイエス様の御名前を通して、あなたの御前にお捧げ致します。

2月誕生者の祝福祈祷

詩編 121 編 5～8 節

「主はあなたを見守る方／あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。昼、太陽はあなたを擊つことなく／夜、月もあなたを擊つことがない。主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように。あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに。」

神様。

私たちは、2月最初の聖日に、あなたから尊い命を与えられ、私たちの友となってくださった方々を憶えて祈りを合わせています。あなたは、私たちが母の胎内にいる時から、私たちのことを見つけ、今に至るまで導いてくださいました。この2月生まれの方々も、それぞれの人生において、あなたによって召し出され、あなたによって導かれてきたことを受け入れ、今あなたの御前にあって信仰の日々を過ごしています。どうか、あなたを見上げ、慕うことをやめないこの方々を豊かな祝福で満たしてください。限りない導きと支えをお与えください。また、人は一人では生きてはゆけません。この方々の周りにいらっしゃる掛け替えのないご家族、ご友人の上にもあなたの恵みが注がれますように。親しき人の輪が、あなたによって祝福されますようにお願い致します。

この祈り、尊き主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。